

# 最適化数学 第6回

## [今回の項目]

- ① 復習：ラグランジュ乗数法
- ② 等式制約が複数ある場合
- ③ 不等式制約問題

復習：制約が一つの場合

$$\text{最小化 } f(x, y) := x - y$$

$$\text{制 約 } g(x, y) := 2x^2 + 3y^2 - 1 = 0$$

[定理]

$$\text{最小化または最大化 } f(x)$$

$$\text{制 約 } g(x) = 0$$

に対して、 $\bar{x}$  を局所最適解とする。  $\nabla g(\bar{x}) \neq \mathbf{0}$  ならば、ある数  $\lambda$  が存在して、以下が成り立つ：

$$\nabla f(\bar{x}) = \lambda \nabla g(\bar{x}), \quad g(\bar{x}) = 0.$$

今回の話題：制約が二つの場合は？

$$\text{最小化 } f(x, y, z) := z$$

$$\text{制 約 } g_1(x, y, z) := x^2 + y^2 + z^2 - 4 = 0$$

$$g_2(x, y, z) := 3x - \sqrt{3}y + z - 3\sqrt{3} = 0$$

# 等式制約が二つある場合

## [定理]

### 最小化問題

$$\text{最小化 } f(x)$$

$$\text{制約 } g_1(x) = 0, g_2(x) = 0$$

を考え、 $\bar{x}$  を局所最小解とする。  $\nabla g_1(\bar{x}), \nabla g_2(\bar{x})$  が一次独立ならば、ある数  $\lambda_1, \lambda_2$  が存在して、以下が成り立つ：

$$\nabla f(\bar{x}) = \lambda_1 \nabla g_1(\bar{x}) + \lambda_2 \nabla g_2(\bar{x})$$

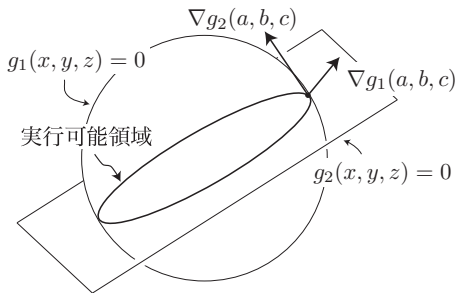
$$g_1(\bar{x}) = 0, g_2(\bar{x}) = 0$$

# 定理の解説

制約式が複数の場合は 3 変数の問題を考えた方がよい.  $\alpha, \beta, \gamma, \delta$  を定数とする. 以下の問題に対して,  $\bar{x} = (a, b, c)$  を局所最小解とする.

$$\text{最小化 } f(x, y, z) = \alpha x + \beta y + \gamma z + \delta$$

$$\text{制 約 } \begin{cases} g_1(x, y, z) = x^2 + y^2 + z^2 - 1 = 0 \\ g_2(x, y, z) = x + y + z - 1 = 0 \end{cases}$$



# 等高面

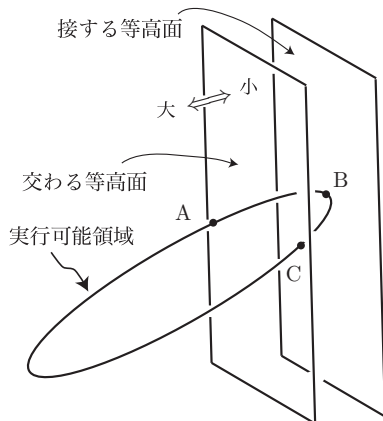
3変数関数が同じ値をとる点  
 $(x, y, z)$  の集合

$$f(x, y, z) = (\text{定数})$$

を等高面と呼ぶ。  
点が  $A \rightarrow B \rightarrow C$  と動くとき、  
増減表は

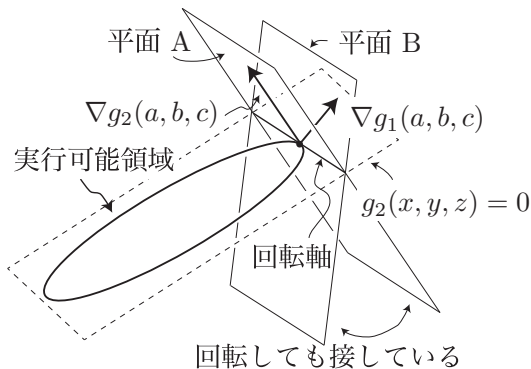
$(x, y)$	A		B		C
$f(x, y)$	大	↘	小	↗	大

となる。よって、点 B で局所最  
小解をとる。



局所最適解で目的関数の等高面は  
実行可能領域と接する

# 実行可能領域と接する平面



よって、実行可能領域に接する平面の法線ベクトルは、回転させた平面のものも含めて、

$$\lambda_1 \nabla g_1(a, b, c) + \lambda_2 \nabla g_2(a, b, c)$$

と書けることがわかる。

# 等式制約が二つある場合

## [定理]

$$\begin{array}{ll} \text{最小化} & f(x) \\ \text{制約} & g_1(x) = 0, g_2(x) = 0 \end{array}$$

に対して、 $\bar{x}$  を局所最小解とする。  $\nabla g_1(\bar{x}), \nabla g_2(\bar{x})$  が一次独立ならば、ある数  $\lambda_1, \lambda_2$  が存在して、以下が成り立つ：

$$\begin{array}{l} \nabla f(\bar{x}) = \lambda_1 \nabla g_1(\bar{x}) + \lambda_2 \nabla g_2(\bar{x}) \\ g_1(\bar{x}) = 0, g_2(\bar{x}) = 0 \end{array}$$

$(a, b, c)$  は局所最小解

⇒ 局所最小解で目的関数の等高面と実行可能領域は接する

⇒  $\nabla f(a, b, c) = \lambda_1 \nabla g_1(a, b, c) + \lambda_2 \nabla g_2(a, b, c)$

# 例題

最小化  $z$

制 約  $x^2 + y^2 + z^2 = 4$

$$3x - \sqrt{3}y + z = 3\sqrt{3}$$



# 練習問題

$$\begin{array}{ll} \text{最小化} & x^2 + y^2 \\ \text{制 約} & 2x + y + z = 1 \\ & x - y - z = 0 \end{array}$$

# 不等式制約問題

## Example (射影問題)

平面  $4x + y + 2z = 2$  と単位球の内部  $x^2 + y^2 + z^2 \leq 1$  との共通部分の点で、点  $(2, 3, 4)$  までの距離が一番近い点を求めよ。この問題は

$$\text{最小化 } f(x, y, z) := (x - 2)^2 + (y - 3)^2 + (z - 4)^2$$

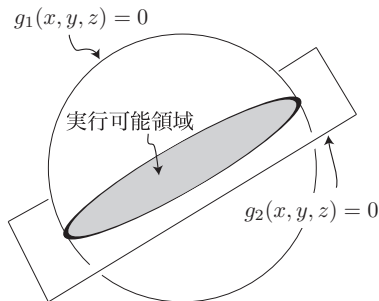
$$\text{制約 } g_1(x, y, z) := x^2 + y^2 + z^2 - 1 \leq 0$$

$$g_2(x, y, z) := 4x + y + z - 2 = 0$$

と定式化できる。すると制約式に不等式と等式が現れる。

# 射影問題

最小化  $f(x, y, z) := (x - 2)^2 + (y - 3)^2 + (z - 4)^2$   
制約  $g_1(x, y, z) := x^2 + y^2 + z^2 - 1 \leq 0$   
 $g_2(x, y, z) := 4x + y + z - 2 = 0$



# 不等式が一つの場合

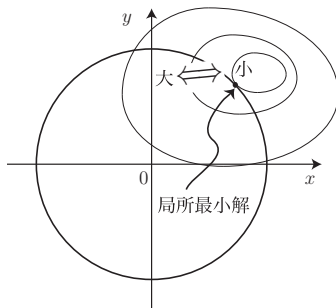
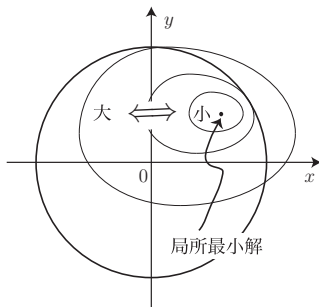
まず制約式が円周とその内部を表す不等式一つの場合

$$(P) \text{ 最小化 } f(x, y)$$

$$\text{制 約 } g(x, y) := x^2 + y^2 - 1 \leq 0$$

$(a, b)$  を局所最小解とすると、次の二つの場合が考えられる：

- 1  $(a, b)$  が円の内部にある ( $g(a, b) < 0$ ) 場合
- 2  $(a, b)$  が円周上にある ( $g(a, b) = 0$ ) 場合



$(a, b)$  が円の内部にある ( $g(a, b) < 0$ ) 場合

このとき,

$$\nabla f(a, b) = \mathbf{0}$$

が成り立つ.

解説  $(a, b)$  は制約なしの最小化問題

$$(P') \quad \begin{array}{ll} \text{最小化} & f(x, y) \\ \text{制 約} & \text{なし} \end{array}$$

の局所最小解である. これを次の具体例で説明する.

$$\left\{ \begin{array}{ll} \text{最小化} & x^2 + y^2 \\ \text{制 約} & x^2 + y^2 - 1 \leq 0 \end{array} \right. \quad \left\{ \begin{array}{ll} \text{最小化} & x^2 + y^2 \\ \text{制 約} & \text{なし} \end{array} \right.$$

左側の問題の最小解は  $(0, 0)$  である. ここで, 最小解が実行可能解の内部に含まれているので, 制約を外した右側の問題の最小解も  $(0, 0)$  になる. 一般の場合も同様なので,  $\nabla f(a, b) = \mathbf{0}$  が成り立つ.

## $(a, b)$ が円周上にある ( $g(a, b) = 0$ ) 場合

このとき, ある実数  $\lambda$  が存在して,

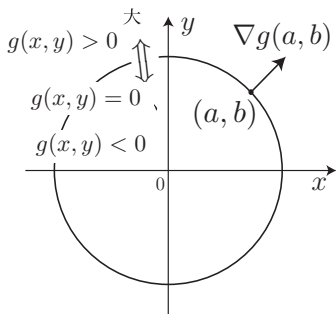
$$-\nabla f(a, b) = \lambda \nabla g(a, b) \quad \text{かつ} \quad \lambda \geq 0$$

が成り立つ ( $\lambda$  の符号が  $\geq 0$  であることに注意).

解説 一般的に  $\nabla g(a, b)$  は  $g$  の等高線に直交し,  $g$  の値が増える方向を向いている. 一方  $\{-\nabla f(a, b)\}$  は, 目的関数  $f$  の等高線に直交し値が減る方向なので前出の図の右図より, 実行可能領域の外側を向いている. よって, 二つのベクトルが同じ方向を向いていることから

$$-\nabla f(a, b) = \lambda \nabla g(a, b), \quad \lambda \geq 0$$

となる.



# KKT 条件

上記二つの場合をまとめて書くと、

## [定理]

最小化問題

$$\begin{array}{ll} \text{最小化} & f(x) \\ \text{制約} & g(x) \leq 0 \end{array}$$

に対して、 $\bar{x}$  が局所最小解であり、 $\nabla g(\bar{x}) \neq \mathbf{0}$  ならば、ある数  $\lambda$  が存在して、以下が成り立つ：

$$(*) \quad \begin{cases} -\nabla f(\bar{x}) = \lambda \nabla g(\bar{x}) \\ \lambda g(\bar{x}) = 0, \lambda \geq 0 \\ g(\bar{x}) \leq 0. \end{cases}$$

最小化  $f(x)$  に対して、 $\bar{x}$  が局所最小解であり、  
制約  $g(x) \leq 0$   $\nabla g(\bar{x}) \neq \mathbf{0}$  ならば、ある数  $\lambda$  が存在して、以下が成り立つ：

$$(*) \quad \begin{cases} -\nabla f(\bar{x}) = \lambda \nabla g(\bar{x}) \\ \lambda g(\bar{x}) = 0, \lambda \geq 0 \\ g(\bar{x}) \leq 0. \end{cases}$$

## 証明.

$g(\bar{x}) < 0$  のときは、上記議論の (1) より  $\nabla f(\bar{x}) = \mathbf{0}$  となる。  
 $\lambda = 0$  とおくと、 $-\nabla f(\bar{x}) = \mathbf{0} = \lambda \nabla g(\bar{x})$  となり、また  $\lambda = 0$  より  
 $\lambda g(\bar{x}) = 0$  なので、(\*) が成り立つ。

$g(\bar{x}) = 0$  のときは上記議論の (2) より、ある実数  $\lambda$  が存在して、  
 $-\nabla f(\bar{x}) = \lambda \nabla g(\bar{x})$ ,  $\lambda \geq 0$  となる。また、 $g(\bar{x}) = 0$  より  
 $\lambda g(\bar{x}) = 0$  なので、やはり (\*) が成り立つ。 □



# 例題

$$\begin{array}{ll} \text{最小化} & f(x, y) = x^2 + 6xy + y^2 \\ \text{制 約} & g(x, y) = x^2 + y^2 - 1 \leq 0 \end{array}$$

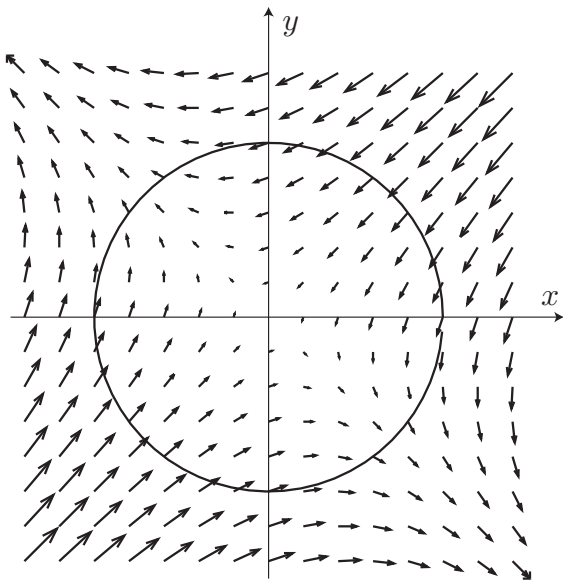


Figure: 点  $(\pm 1/\sqrt{2}, \mp 1/\sqrt{2})$  で  $-\nabla f(x, y)$  が直交外側を向いている.

# 練習問題

$$\begin{array}{ll} \text{最小化} & f(x, y) = x^2 + 3xy + y^2 \\ \text{制 約} & g(x, y) = x^2 + y^2 - 1 \leq 0 \end{array}$$